

## (二) 全国大学史資料協議会

### 二〇〇〇年度総会・全国研究会

二〇〇〇年度の全国大学史資料協議会総会・全国研究会は九月二十日から二十二日までの三日間、神戸女学院、関西学院、甲南大学を主会場にして開催された。今回の協議会研究会には関西学院創立一一一周年記念事業委員会から協賛金が寄せられた。また、全国研究会終了後、記念講演の講師をして下さった松澤<sup>まつざわ</sup>貞子<sup>けいこ</sup>先生が講師謝礼を寄贈して下さいました。出席者は東西あわせて四四大学七〇名、個人会員一三名、オブザーバー二名の計八五名と前回を上回り、天候にも恵まれ、盛会であった。協議会では年々工夫を重ね、常に参加者に有用な研究会開催を目指してきたが、今年度も従来のパネルディスカッションや分科会とは違ったものを試みた。二日目の研究会で専門業者に参加してもらって会員校が関心を持っている各専門技術、例えば写真のデジタル化やデータベースソフト、デジタル編集技術などを実際に見せてもらうことになった。

全国大会初日は神戸女学院大学文学館二階Ｌ―二八教室で総会、記念講演があった。神戸女学院理事長・院長の城崎<sup>じょうさき</sup>進<sup>すすむ</sup>先生の開会挨拶に続いて全国大学史資料協議会総会が始まった。議長、副議長の選出のあと、二〇〇〇年度からの副会長校・桃山学院の年史委員会の西口 忠氏から総会の前に行なわれた役員会での審議事項(承認事項)の報告があり、役員校の改選、一九九九年度の東西共同事業が承認された。次に二〇〇〇年度から会長校となった東海大学の理事長室文書課の瀬水澄夫氏の挨拶があり、続いて本年度の活動計画を東日本事務局補佐校・中央大学と西日本事務局校・関西大学がそれぞれ報告した。質問や異議もなく総会は閉会した。



松澤員子先生

短い休憩をはさんで記念講演に移った。講演の前に神戸女学院史料室長の上野輝将先生から講師の松澤員子先生の紹介があった。現在、平安女学院大学教授の松澤先生は神戸女学院大学前学長で、それ以前には国立民族学博物館(以下民博と略す)に勤めておられた。神戸女学院では学長として活躍下さる傍ら、史料室の活動にも関心をお寄せ下さり、史料室としては今後、民博での経験をもとに史料整理から展示までさまざまなことにご助言、ご協力いただけるものと期待している。先生の演題は「標本資料の情報整理から展示まで―国立民族学博物館での経験から―」で、途中約一五分間ビデオを用いた。先生は民博に発足準備室の段階から関わり、情報システム委員として、始めからコンピュータを利用した資料整理を目指して情報検索システムを作られた。そこで、民博での標本資料のデータの取り方、管理ファイルの作り方など情報検索に必要なシステム作りについての基本的な考え方や展示のポリシーなどを説明された。資料は分類せずコード化する。標本も図書も全て同じコードを使用し、収蔵場所を明確にする。

資料の管理にはIDナンバーつきの管理ファイルを用い、このファイルが全ての情報検索システムのものになる。そして展示の際もつとも心がけることは文字情報よりも見てわかる展示にすることである。

協議会では以前に民博で研修を行なったことがある。東日本と西日本でそれぞれに大学史担当者のための会を作り活動していた一九九二年、東日本(当時は関東地区大学史連絡協議会)が関西での研究会を計画したことから東西合同研究会を開催する運びとなった。この民博での合同研究会がきっかけとなって東日本と西日本の大学史担当者の会に合同の気運が高まり、一九九六年に現在の全国大学史資料協議会が発足した。当時の見学会では収蔵庫の中も見せてもらい、最新の設備と規模の大きさ、コンピュータによる検索システムに驚きの声をあげていた。今では日常業務にコンピュータを利用する学校が増え、以前聞いた話がより身近な問題となってきた。このことも思い合わせながら講演を伺った。

最後に先生は大学史資料の保存とデータベース構築への私見として、情報を後世に伝えるためにすべきことは文字として残すと共にデジタル化することであり、検索できるシステムを作ってコンピュータを利用することを勧めると強調された。さまざまな示唆に富んだ有用な話であった。講演終了後、質疑応答の時間となったが、参加者皆が強く関心を持っている話題であり、しかも具体的でわかりやすかったこともあって質問者があつた。予定をオーバーして、七人目の質問が終わったところで終了となった。このあと図書館本館閲覧室での展示「明治期讀美歌と聖書」を見るために移動し、そこからキャンパスを見て回った。ヴォーリズ建築の美しい校舎に参加者の間からは感嘆の声やため息がもれていた。

懇親交流会は会場を三宮のホテルに移してもたれた。懇親会の席上、松澤先生の講演がよかったこと、校舎・校庭に感動したことなど、神戸女学院での感想をいろいろな方から伺った。皆、初日の会合に満足されているようであった。

二日目は関西学院大学E号館一階一〇二教室で全国研究会が行なわれた。関西学院院長の山内一郎先生、関西学院学院史編纂室長の山本栄一氏の挨拶に続いて講演に移った。午前は関西学院大学経済学部教授の井上琢智先生の『大学のアーカイヴズ』と『大学とアーカイヴズ』―利用者の立場から―と題する講演があつた。先生ご自身のアーカイヴズとの出会いを通して考えたことを語られた。「史料を残す」ということには利用者と記録者との間でギャップが生じる。保存技術とは別に、その史料が残すべきものであるか否かの見極めが難しい。そして「大学とアーカイヴズ」を考える上で今後は地域に開かれた大学という観点から地域に根ざしたアーカイヴズを目指し、史料を積極的に集めるようにしなければならない。しかし継続して業務を行なっていくためにはアーキヴィストの不足が大きな問題となる。スタッフの中にはその学校の特質にあつた専門家が必要である―と。講演をうけて質疑応答があり、そのあとフリートークをする予定であつたが、時間が足りず、事前にアンケートをとって集められた質問、意見等を紹介するに留まった。

午後からは講演と専門業者による展示と実演・実習があつた。講演は関西学院大学総合教育研究室の深井 純先生の「デジタル画像を用いた美術作品研究装置の開発」で、非常に専門的かつ技術的な話であつた。資料をデジタル情報化することは半永久的に保存ができ、扱いが容易であるという点で有効であると考えられる。またこの技術は書物にも応用がきき、文書情報としてではな

く画像情報として原物回帰ができる。この考えをもとに先生が開発された作品を実際に映写しながら話は進められた。講演終了後、質疑応答をする予定であったが、時間の都合で次の専門業者の自社紹介に移った。

参加のあった五社（四社プラス一団体）の各五分程度の展示説明を聞いたあと、各自、関西学院学院史編纂室二階ホールの会場を自由に見て回った。印刷会社や写真専門業者のほか現物資料（特に紙資料）の保存・修復を行なっている団体（四社共同）がそれぞれにスペースを設け、パソコンを使った展示・実演などを行なっていた。二日目はここで自由解散となった。

三日目は甲南大学図書館A Vホールに集合して甲南大学広報室の土山敏夫氏の解説で震災時の様子をうつつしたヴィデオを見た。甲南学園は阪神間の学校の中でも特に被害の大きかった学校の一つで、現在でもキャンパスにはまだ工事中の校舎がある。ヴィデオのあと土山氏の講演「甲南大学の阪神大震災―教務部の対応を中心に―」を聞いた。危機に際して責任者がいかに早く決断を下せるか、その際誰が責任者となり得るのかといった危機管理体制の重要性を強調し、甲南大学では震災当日に仮設校舎が手配されたこと、すぐに全ての後期試験をレポートにきりかえたことなど、素早い対応について話された。講演後、甲南学園学園資料展示室を見学し、そのあとマイクロバス二台に分乗して次の見学場所に向かった。白鶴美術館、白鶴酒造資料館の二館を順に自由見学した。見学後、白鶴酒造資料館の前で解散、全国研究会の全日程が終了した。参加者は二手にわかれ、それぞれ三宮方面、大阪方面へと向かうバスに乗り込み、帰途についた。

二〇〇〇年は神戸女学院創立一二五周年の記念の年にあたり、全国の皆様にお越しいただき、学校を見ていただく機会を得られたことを感謝している。また参加者の皆様から一二五年記念誌についての感想や校舎に対する感嘆の言葉なども伺えたことを、今回の全国大会が盛会であったことと共に喜んでいる。盛り沢山の内容をスケジュールに組み込んだことで時間充分とはいえなかったが、充実した研究会であった。見学先との交渉からあらゆる準備に至るまでのいっさいを引き受けて下さった桃山学院の西口氏、関西大学出版部出版課の福井智佳子氏、業者との交渉、展示のためにご尽力下さった関西学院学院史編纂室の池田裕子氏に特に御礼申し上げる。このほか、準備、行事の進行に携わった全ての方々に深く感謝申し上げます。二〇〇一年度は横浜で開催予定と伺っている。二十一世紀もますます協議会が発展を続けていけるよう願っている。